

きのこ歳時記7

—近代の短歌より—

今野 英山

短歌の中で茸という題材が自由奔放に扱われるようになったのは明治以降である。江戸時代までの茸の歌といえはほとんど松茸のことをさす。今でも京都辺りでは茸といえは松茸であり、それ以外の茸は雑茸として一蹴されるらしい。

明治になり短歌は革新の時代に入ったといつてよい。それを先導したのは正岡子規である。子規は俳句の革新運動と共に短歌の革新にも着手し、「歌よみにあたふる書」の中では、従来の短歌を形式主義に陥った救いようもないものと酷評した。「貫之は下手な歌よみにて古今集はくだらぬ集に有之候」というくだりは有名である。子規は写実主義を唱え、従来の歌の形式に囚われず身近なものを写生することで真実に迫るべきだと主張した。そうした明治の新しい潮流の中で茸という題材も、松茸一辺倒から身近で様々な茸へと広がっていったと思われる。

〔正岡子規〕

それでは早速子規の歌を見てみよう。歌集「竹乃里歌」に載せた茸十首連作から紹介する。

奥山に淋しく立てるくれなゐの木の子は人の命とるとふ

ベニテングタケのことだろうか。明治以前に毒キノコを詠んだ短歌はあまりない。俳句（俳諧）の世界では芭蕉や一茶などが毒茸を時々登場させている。俳諧は庶民の文学で、短歌は貴族や武士の文学だったという見方もあるが、短歌が形式的なものに墮し

ていた証拠でもある。

いただきにあやしき神を祭りけり茸きのこかりすさみ山深く来ぬ

茸狩りに夢中になって山奥に這入りこんでしまったら、なかなか怪しげな神様が山頂に祭られていた、という意味だろう。我々もよく体験することでありそれを素直に詠んだ歌だ。

誰たが叫ぶ声の木玉こだまに鳥鳴きて奥山淋し木の子狩る頃

茸狩りで互に大声で呼び合っているにもかかわらず、帰ってくるのは木霊だけ。山奥の寂しさがよく表れている。

浅山ベニタケのいくち紅茸踏みわけて黒子の木の子とるもうれしく



正岡子規

イグチやベニタケを踏みしだいて目的の茸を採る喜びを詠っている。「黒子の木の子」とは一体何だろう。黒っぽい茸という意味か、それとも芝居の黒子（黒衣）と同じく表に出ない隠れた茸、例えばハタケジメジのようなものだろうか？

〔伊藤左千夫〕

正岡子規の門弟が集う「根岸短歌会」。その機関誌として「アララギ」を創刊したのが伊藤左千夫である。松戸の矢切の渡しを舞台とした小説「野菊の墓」の作者としても知られている。

ふゆごもるわれを親しむ隣となりおうな 姫雪割茸たけを今日もくれしも

エノキタケを詠んだと思われるこの歌からは作者の生活が髣髴としてくる。

〔島木赤彦〕

今日の日も足らふに似たりわが掘りし雪割茸あつものを糞あつものにし
て

庭つづき柿の畑の雪深し雪割茸を掘りて得にけり

伊藤左千夫の弟子である赤彦はアララギの代表歌人である。やはりエノキタケを詠んだこの歌もまた、諏訪に暮らした赤彦の生活を写生したアララギ派らしい歌といえるべきであろう。

〔斎藤茂吉〕

正岡子規の流れを汲むアララギの巨星が斎藤茂吉である。茂吉は精神科医として青山脳病院の院長を務めたから、短歌結社アララギを主宰した。子規の写実主義を推し進め、実相観入（現実の姿を凝視することにより見えなかったものが見えてくる）を唱えた。

椎茸をそだてつつあるところありきのふもけふもしくれ



斎藤茂吉

ふる山
しめじ茸栗茸むらさきしめじ茸木の葉のつきしままに並
めたる

都会より来にし人に茸をばルツクサツクに大切にせり

茂吉の故郷は山形県の新潟村である。茸狩りや茸を食べる歌をかなり詠んでいる。

みちのくの瀬見のいでゆのあさあけに熊茸というきのこ
売りけり

熊茸というのは何であろうか。熊茸と書いてシシタケと読ませる地方もある。シシタケはコウタケの類似種なのでこれはコウタケのことかもしれない。

紅茸の雨にぬれゆくあはれさを人に知らえず見つつ来に
けり

この歌は従来にはない見方である。ベニタケの一見華やかな色合いと雨にうたれて朽ちていく様がものあわれに通じている。人の世のあわれさを暗喩しているのではないだろうか。

〔結城哀草果〕

雷いかづちに裂けしまま立つ榎ぶなの木に馬の蹄ひづめなす茸たけがあまた

撫ぶなの木に生ふる茸を照らしたる月甲子山におちゆかむ

哀草果は山形出身の農民歌人。同じ山形出身の斎藤茂吉に師事したアララギの歌人である。生活に立脚した力強い歌を詠んでいる。馬蹄型の茸とはツキヨタケであろうか？ヒラタケやムキタケだろうか？二首目の月が照らす茸と言えばやはりツキヨタケか。

〔土屋文明〕

檜ひたけは山形のナメコに劣るとも此所に群がるうれしきものを

伐りし木の朽ちて木の子の生ふるまで此の山下に住みとどまりし

斎藤茂吉からアララギを継いだのが土屋文明である。「生活即短歌」を唱え、社会への批評意識から即物的なりアリズムの歌が多く「文明調」と言われている。諏訪の高等女学校で校長などを務めた関係から自然の中での生活を詠つたものも多い。この二つの茸の歌にもそうした傾向が読み取れる。

〔与謝野晶子〕

アララギ派の写実主義（リアリズム）に対して、夢や空想の世界に憧れ情緒や観賞に重きを置くのが浪漫主義（ロマンチズム）。その代表的歌人が与謝野晶子である。

木のもとに赤くらげほどつややけき茸のならば富士見台かな

赤い茸を海に漂う幻想的なアカクラゲに見立てている。アカクラゲというのは赤い傘に放射状の筋のある美しいクラゲであるが、イメージとして近いのはアカヤマタケの仲間かもしれない。



与謝野晶子

〔吉井勇〕

寂しければ山どぶろくをあふるべう生椎茸を炉火の上に焼く

同じく浪漫派の歌人。酒の歌や退廃的な歌が多く、耽美派と評されている。「寂しければ」で始まる一連の歌はすべて酒につながっている。寂しければどぶろくの肴に炉端で椎茸を焼くという歌である。

〔神原克重〕

むしろいっぱい並べて見つわがとりし鑄初茸はどれにかあらん

秋山にあさる山どり黒しめぢいづれ名のよき茸たけにもあるかな

浪漫派の代表格若山牧水の門下。千葉県生まれで戦前の東葛飾中学校長や船橋中学校校長などを勤めている。ハツタケは千葉県内で採つたものだろうか。「山どり」はヤマドリタケ、「黒しめぢ」はヤギタケかスミゾメシメジかシモフリシメジか。千葉県内ではないかもしれない。

〔樋口一葉〕

帰らんといいひそめしより雲はやしとる茸^{たけ}おほくなりになるかな

一家の大黒柱として生活のために小説を書き始め、二四歳で死去するまでのわずか十四ヶ月間の文筆活動で、日本文学史に残る名作を次々と書き続けた一葉。短歌の才能もあつたという。茸狩りの帰り際に誰もが経験のある状況を詠っている。

〔宮沢賢治〕

とりて来し白ききのこを見てあれば涙流れぬ寄宿の夕

大正5年、盛岡高等農林学校2年在学中の作品。ドクツルタケのような猛毒茸を詠ったのか、それとも故郷の洪民村を思い起こすような懐かしい茸を詠ったものかは残念ながら不明。賢治は博学的に広範な好奇心を持っていたことから、猛毒キノコを採ってきて自然界の不思議さに一種の感動を覚えたという可能性もある。

〔小杉放庵〕

野のはての雑木林に虹たてる見ゆあす行かむ雨のあがり
のしめじ生ふべし

松の下に一雨しなば生ふるべき初茸故に雨の待たるる

日光で生まれた画家で歌人。都市対抗野球大会の優勝旗である「黒獅子旗」のデザインで知られる。日光町長も務めた。茸を採るために雨が待ちどおしい、雨が止んだら早速見に行こうという歌。

〔依田秋圃〕

籠のなかは楢茸しめじ初茸にかぶせてありし里芋の葉を
分け入りてはつたけ採ると紅茸のうつくしき見つ虫が啼
くなり

依田秋圃は明治・大正にかけて林業指導をした技術者である。仕事柄山菜や茸の歌が多いようだ。ここでも食菌ではないがベニタケの美しさを詠っている。日本人の美意識にかなう茸である。

〔尾山篤二郎〕

牛額しめじ栗茸^{うしびたい}筍^{ほつまたけ}茸岩茸いくつ狩り暮らす日や

この歌には茸が4種類とイワタケまで出てくる。牛額とはクロカワのことである。シメジ、クリタケ、ホウキタケと贅沢に採っている。作者は明治・大正・昭和に活躍した漂泊の国文学者で歌人。茸に囲まれた日々^{うしびたい}に陶醉している。羨ましいかぎりだ。

明治から昭和にかけて、茸の歌はそれこそきりが無いほど存在する。今回はあえて松茸や椎茸の歌を割愛したが、やはり一番多い歌は松茸であり、次に椎茸である。

松茸にもみぢ折りそへゆく人にまたもあひけり秋の山み
ち(明治天皇)

もぎとりていまだ露けき椎茸を買へと持て来ぬ春日の縁
に(若山牧水)

次回は戦後活躍した歌人の茸の歌を取り上げてみたい。